

平成29年9月1日発行 春燈/第72巻第9号(毎月1回1日発行) 昭和21年7月22日第3種郵便物認可

# 春燈

2017 September

9  
月号



主宰の句

安立公彦

敦忌の墓碑を彩る牡丹かな

炎天を舞ふ一点の黒き蝶

忘却てふ帰らざるもの蛍手に

紫陽花の名残の花も大暑かな

水打つて過ぎし日を喚ぶ母を呼ぶ





安住敦の句

秋風や亡き友に二兎われにも二兎

『午前午後』昭和四十年

「春燈」を守り育てることに熱意を注いでいた敦先生にとつて、有力な同志であり協力者であった木下夕爾が五十歳の若さで亡くなった。福山の夕爾宅で遺影の前に奥さんと二人のお子さんが言葉少なに応待してくれた。敦先生の子供さんよりだいぶ年下の二人のお子さんを前にして、父親のいないこれからの思いやる先生の、慈愛の眼指が注がれていたことであろう。

和田 絢子



安住敦の句

夜の蟬のまことしやかに鳴きにけり

『午前午後』昭和四十三年

「浸潤の譏といふ語、論語顔淵篇にあり」の前書がある。浸潤の譏とは孔子十哲の一人顔淵の言葉、「水が物に次第にしみ入る様に讒言をして少しずつ人を貶めること」とある。又、上五の措辞からも、うるさい批判を夜の蟬とたたって一線を引いた先生の御決意が窺える。

その後、万太郎主宰のもと、名編集長として今日の「春燈」の礎を築かれた事は誰でも知る所である。

中村紀美子

# 燈下集



○ 加藤 良子

試行錯誤の一日過ぐるや梅雨ごもり  
ティータイム柚子の花咲く会津かな  
林立の筆立に挿す団扇かな  
上りくる運河に潮の香夏きざす  
梯梧咲き散歩の道や知覧恋ふ

○ 鈴木 静恵

山鳩のくぐもる声や梅雨に入る  
郭公や朝の目覚を促さる  
一掬の水の甘露や野の泉  
十一や苔むす岳の遭難碑  
父の日や遙かに仰ぐ父の星

○ 鈴木 直充

入間野に住み古る茅花流しかな  
饒舌にながれゆくなり夏至の川  
水のんで身をゆすりたる芒種かな  
半夏生草わが魂とあそびける  
海鳴や竜舌蘭にふかき傷

○ 木村 傘休

朝涼や善知鳥の海は瑠璃色に  
風あれば風を自在に夏つばめ  
柏樹の黒々灯る梅雨入かな  
百合樹の高き葉風や梅雨晴間  
夕涼や島に祈りの鐘流れ

○ 高橋和女

築打つや坂東太郎の膝借りて

髪染めて力をもらふ夏初め

子の忌来る青水無月の風添はせ

忘却は良薬なりし日日草

藍ちぢみ風ひんやりと纏ひけり

○ 柴崎甲武信

父の日や家伝のシベリア抑留記

御代変はる日の近からむ梅雨の蝶

林より森の居心地ほととぎす

青梅のサンプルとして落つ一つ

水打つて真砂女銀座の路地守りし

○ 近藤牧男

更衣月日ひるげてゐたりけり

炎天寺らしくなりたる暑さかな

黒揚羽大きな影を落としいけり

菖蒲田に水ゆきわたる夕べかな

まつすぐに帰れぬ日なり浮いて来い

○ 吉澤恵美子

父の忌につづく母の忌紫陽花路

濃むらさき濡れて立ちをり花菖蒲

風に舞ふ敦盛草の美男ぶり

父の日や雲一つゆく青き空

「礎(いしじ)」より声の聴こゆる沖繩忌

○ 卜部黎子

竹皮を脱ぎて躲せぬ風当り

生れたてのこゑ張るパンダ涼気満つ

ねんごろに付き合ふ五体更衣

茜雲とどめて夏至の海暮るる

蛸袋ひと花づつの夕明り

○ 卯木堯子

季語に無き尾長の映ゆる梅雨の庭

総身もて翻るなり夏の蝶

透明体香水も客エレベーター

毛嫌ひす始祖は氷期の毛虫として

オルゴール兼蛸籠主持つ

○ 深川敏子

蚩鳥賊もう始まつてゐる海の紺  
屋上の稲荷神社や鴉の子  
もてなしの始めの白湯の花袖かな  
さくらんぼ這ひ這ひの子の早きかな  
赤を着てトマトを齧り今日強気

○ 和田幸江

奥の細道さへづりとはた水音と  
秩父嶺にかかる笠雲田植どき  
草笛や父と過ごしし日の夕日  
神域にむかふ坂道濃紫陽花  
病める身の時遅々として夏兆す

○ 大室恵美子

時の日や大事に使ふ持ち時間  
メロデーにならぬ口笛夏の浜  
千年の大樹の誇り苔の花  
香水や着こなして黒華やかに  
灯涼し俳諧飽きぬ遊びかな

○ 尾野奈津子

名も知らぬ鳥来て梅雨を歌ひけり  
若竹の風の私語聞く嵯峨野道  
郭公や木曾の里山明けやらず  
うつそりと梅雨の満月浮かびけり  
二、二が四にならぬ心算光秀忌

○ 小嶋恵美

朝焼の彼方の人を想ふかな  
気位のゆるぎなきかな花菖蒲  
夏蝶の木洩れ日となり蝶となり  
茗荷の子さくさく刻む夕明り  
青蚊帳に青き夢みし戦後かな

○ 三宅文子

銀座朱夏地下三階の能楽堂  
晚涼やシテの消えゆく橋がかり  
短夜やむかしをとこの秘めし恋  
ゆるゆると生くるときめてところてん  
母でありしころの豊かさ麦の秋

# 当月集

安立 公彦選



○ 荒井ハルエ

遺影よりやさしき声す百合の花  
一葉の路地やあぢさぬ肩に触れ  
捨てられぬ行李一つや更衣  
草にとび蹴の柄にとび雨蛙  
夕闇や虫袋のうすあかり

○ 持田信子

隕石に鉄の匂や青葉冷  
西日濃し板碑に残る阿弥陀像  
これよりは箱根へ三里虎が雨  
雲の峰渚に拾ふ貝一つ  
六月や五臓にひそむ虫一匹

○ 海村禮子

鈴蘭の花より小さく生きて来し  
梅雨晴間蝶は高だか飛びゆけり  
梅雨寒し傘打つ雨の音しきり  
さやさやと青田は早も風を呼ぶ  
白雨来と銀座の時計見上げたり

○ 永井恵子

蛍火や良妻賢母とほく過ぎ  
水色の朝の来てをり額の花  
四阿に雨ひきよする七変化  
小溝にも水ゆたかなる田植かな  
あぢさぬや友つきつきと寡婦となり

○ 佐藤玲子

電池切れのラジオの音や梅雨うとまし  
「尻こすり坂」の矢印梅雨の旅  
貸切りの足湯万緑ほしいまま  
もうひとつ増ゆる吉事や梅雨晴間  
はからずも鳥の子育て見る事に



# 春燈の句

安立 公彦選

百花咲く竜飛岬や風涼し

千葉 木村みどり

桜桃忌車窓に大き津軽富士

森番に声かけてゆく河鹿笛

菩提樹の花の香瞑想日和かな

彦星もためらふ川の暗さかな

織姫の機屋を出でず降り続く

デラウェア刻かけて食ぶ夕灯

荒梅雨や雨漏る音に寝もやらず

リフオーム終へ涼風窓を吹き抜くる

帰宅するや先づ普段着の涼しさよ

己が身の一語を悔いぬ梅雨寒し

亡き夫の思ひ出手繰る梅雨満月

語部の津軽訛や桜桃忌

父の日や明治の父のど根性

神奈川 新海 英二

埼玉 長谷 仁子

広島 川崎 雅子

軍港は白一色や更衣

声ひそめ橋の行き来や蛍の夜

ぶきつちような長子山女を捌きけり

明日よりもつと遠くへ老鷲

さす傘のたたみしままや走り梅雨

昨日今日かかるき雨降るつゆ最中

沙羅落花惑はぬ様を眩しみて

小夜曲となりし川風合歡の花

鳴立庵の松過ぐる風虎が雨

拾ひたる海星の欠片夏の果

墓に来て仏法僧に迎へらる

ゆつくりと前進あるのみ蝸牛

明易や朝刊届く木戸の音

夏草の手入およばぬ狭庭かな

東京 池田 節

東京 佐俣まさを

兵庫 秋山 薫



# 余言

安立公彦

濡れ髪のまま遠花火見てゐたり

中野あぐり

「濡れ髪」は女性特有の形容である。「烏の濡羽色」という言葉に通う艶やかさが感じられる。

作者の住いは下総中山、法華経寺に近い閑静な住宅地である。二階のバルコンからは、かつては江戸川の打上花火が見えたことだろう。或いは今も望見出来るかも知れない。濡れ髪のまま遠花火を見ているという表現は、まさに一幅の日本画の世界である。一読して、ほのかな哀切ささえ感じるといふ内容はみごとだ。

ペン皿に眠るルーペや父の日来

鷹崎由未子

「父の日」は六月の第三日曜日。五月の「母の日」ほどには普及していないが、反面確かな信奉者が多い。この「ペン皿に眠るルーペ」は、わずかに十一音ながら、亡き父上の日常の言動と、その姿勢を思い出すよすがとなっている。ともに亡父の遺愛の品だったと思われる。父上の在りし日

のままの書斎。その机上に置かれたペン皿とルーペ。「眠る」が永遠の刻を具体化している。亡き父上への思いの深い作品である。

総身もて翻るなり夏の蝶

卯木 堯子

この「夏の蝶」は黒揚羽だろう。炎昼の庭。物音の絶えたその一隅を、今しも一羽の黒揚羽蝶が舞っている。

小林清之介氏著、『季語深耕・虫』の中にこういう一節がある。「ことに黒揚羽や烏揚羽は、羽裏の紋のほうが複雑で美しい。何かに驚くとすばらしい速度で飛び去る」。まさに、「総身もて翻る」である。炎天下の只中で一羽の夏蝶を追う作者の視線が見えて来る。「物を映し、その心を表現する」ことこそ、常に心懸けるべき道であろう。

病める身の時遅々として夏兆す

和田 幸江

作者は現在体調をくずされているのだろうか。「時遅々として」に、その思いがよく出ている。誰しも覚えのあること。「あの時はそうだった」と、振り返る気持の中には快癒したわが身への感謝の思いが宿る。作者にその思いが訪れるのも遠からずのことと思う。

この句は作品としての表現が調っている。「病める身の」

と、「夏兆す」の上五下五が、一句の中心を為す、「時遅々として」に、よく支えられている。

母でありしころの豊かさ麦の秋 三宅 文字

上五は字余りになつてゐるが、「母でありし」という字余りが、「ころの豊かさ」をよく包んでゐる。「母でありし、豊かさ」は、大きな内容を持つ言葉だ。母は辞書にも、物事を生み出すもと、と記してある。

作者はいま、子育ての頃の多忙な毎日を振り返り、忙しさの中にあつた心の張りを回想する。それはまた、「ころの豊かさ」に通うものである。豊かさの中の実質は、ひとそれぞれだろうが、「母の豊かさ」は永遠である。

六月やラジオの流す海の唄 岩永はるみ

「ラジオの流す海の唄」には、人によりそれぞれの物語があるろう。ラジオ放送が始まって九十二年。この句を見てみると、そういう歴史の背景などにも思いが及ぶ。数多ある海の唄、その中で人はその人だけの海の唄を心の中に持っている。私の場合は、文部省唱歌「われは海の子」だった。但しこの歌の作詞家には、いろいろな説があるとのこと。「六月や」と大きく切つた上五が善い。また「ラジオ」も、親しみとともに新鮮さを感じさせる。

どげう屋の今日より白き夏のれん 小倉 陶女

「泥鰌」は、歴史的仮名遣いでは「どぢやう」、現代仮名遣いでは「どじょう」、江戸時代には「どげう」と書かっていたと言う。現在でも浅草の駒形どげうはよく知られている。この句、その駒形どげう屋の謂だろう。

「どげう屋の」と江戸語で上五をpushさへ、「今日より白き夏のれん」と続く表現の在り様が善い。今日より白き夏のれん、は如何にも新鮮だ。しかも「どげう屋」が充分に活かされている。作者も江戸っ子（東京っ子）のお一人か、

飲みさしの茶の冷めてゐる梅雨入かな 府川 昭子

「飲みさしの茶」が冷めているということは、日常生活の中でよくあること。言えは些事である。しかしそれに続く、「梅雨入かな」で、一句の内容は深い趣に変わる。

食後のひととき、ふと気付いたお茶の冷え。外はいつしか雨になつてゐる。梅雨に入るということは、気象だけでなく、生活のあり方に関わる問題である。様々な思いが交錯する。この句まさに余情の句である。

今回は左の二句も予定していたが紙幅が足りなかつた。

機町の低き家並や夏燕（京都） 和田 絢子

暮鳴いてぬばたまの闇深めけり 懸林喜代次